2006 年度

「思い出深い音楽」と自伝的記憶に関する研究
―レミニセンス･バンプ・音楽回想類型・口述ネットワークの相互関係から―

キーワード：レミニセンス･バンプ．音楽回想類型．口述ネットワーク．思い出深い音楽

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
西村　ひとみ

長寿社会へと時代の変遷を経てきた現在の高齢者は、音楽を社会的な存在として、「歌は世につれ、世は歌につれ」と捉えてきたと推察するものの、実証的研究としてその音楽と人生の関係性が明確に示されてはいない。

筆者は日本音楽療法学会認定音楽療法士として、主に認知症高齢者への実践において、人生の発達段階の学童期から青年期までに関係性があったと考えられる音楽を介した時、高齢者の変容に繋がる事が多いことを実感している。ただ、重度の認知症高齢者が音楽の思い出を語ることは困難であり、共有するまでには至らないのが現状である。

そこで、本研究においては、各個人の人生における様々な出来事に関する記憶（自伝的記憶）と音楽との関係性の諸相を明らかにするために、アンケート調査と半構造化インタビュー調査を実施した。アンケート調査は、認知機能が衰退していない 60 歳代～90 歳代の 114 名を対象に、人生における「思い出深い音楽」の３曲の自己選択と、その思い出の年代、及び内容を記述する自由再生法とした。さらに、安定度を把握するために、80 歳以上の４名に約３ヶ月の間隔を経て、同アンケート調査を３回実施した。

アンケート調査で得られた質的データを､特徴的な分析視点から探索的に検討した結果、「個人嗜好型」「音楽活動型」「背景音楽型」「音楽受容型」「インパクト型」の５つの音楽回想類型が見出され、人生における音楽の役割的存在を明らかにした。

続いて､「思い出深い音楽」が想起された年代分析から、青年期をピークとした学童期から成人期前期（20 歳代）までの隆起が示され、先行研究から得られた自伝的記憶曲線（レミニセンス･バンプ）と一致していることが明らかになった。よって、学童期から成人期前期までの「思い出深い音楽」を介して関係性を持つことは、個人の「その人らしさ」に寄り添える可能性があることを示唆したといえる。

次に、音楽による自伝的記憶の安定度に関する調査結果は 44%～67%を示し、先行研究と同範囲であることから、有用性を持つデータ（エビデンス）として考えられる。

一方で、終戦を青年期から成人期に迎えている大正コホート（大正生まれ）の５名を対象に、音楽を動機づけとした語りの形態、及び特徴を明らかにすることを目的として、アンケート調査内容を大枠とした半構造化インタビュー調査を実施した。

その結果､音楽が１つのノードとして活性化することによる口述ネットワークの拡散と、文化及び歴史社会を伝承する役割としての付随性が示された。今後は、人間性として捉えた音楽が、高齢者の精神保健を始めとする実践的活用に拡がり、さらに多視点的な学問の相互関係性の構築により、音楽から発信される知見の波及に繋がることを展望とする。